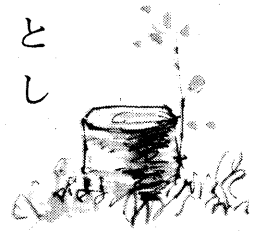


# 研究会参加報告

松井とし



1の提言をうけ、松村康平氏は、●教育集団心理の研究・●劇的活動の研究  
●物媒介活動状況の研究 ●行為法の体系化・組織化 ●かかわり方の科学の確立 ●チームのくみ方の研究指導 ●接在共存状況の7項目を提言された。

2の提言をうけ、岡宏子氏は、研究者の研究が、現場の指導の体系に使えない実情について、

●研究がすべての人間の行動科学を最終目的とする以上、厳密にしなければならぬが、その単一化のための操作を加えるにあたって、すててはならぬものをするにすぎている。

対応させて“生の人間”に使えなければ、その分析はまちがっているかもしれない。

●対応をぬきとる目がないかぎり指導の原理は研究者からは出されない。現場人と、研究者の目の間にお互の循環がな

神戸大学で開かれた第13回教育心理学会のシンポジウム「幼児教育への寄与方法」は司会者・川口勇氏の次のようなことばで始まった。

『今後の教育実践の方向を、どのようにして研究を進め、将来の教育をどのように変えていくか、自身の心理学のあり方をも含めて、今、ここに集まっている人たちと一体になって討議をしたい。』

1 子どもが、家庭生活、または施設で保育をうける場合、子どもの生活を中心に考えていった時には、家庭と施設はどのような関連をもってい

くべきか

2 次に、指導に対する体系をもつべきか否か、科学化が必要か否か、具体的な今後の実践のあり方への方向づけ

3 研究者が現場に出かけていってする研究と、現場の教師の実践にもとづく研究は同じものか、同じであるべきか、または別個のものか

4 実践の場にとっていく保育者がどのような専門教育を身につけなければならないか、養成機関である大学、短大の立場から……』

い。

●現場と研究者がもつ、それぞれの目を広げて、両者の行動空間のダイナミックスでとらえられるような研究者のコントロールが必要である。

等の指摘をされた。

3の提言をうけ、三宅和夫氏は、十数年前から幼稚園の現場とのふれあいをし てこられた体験の中で、

●研究者に対する現場の目から、生きた人間をとらえることにはならぬ研究のあり方と、本腰をいれて現場にはいっていく姿勢の欠除について、

●教育心理学者、発達心理学者をまね、より一層不適合なものを作る実践家の研究のあり方について、

問題とされ、研究者と実践者がタイアップしてつくられるプロジェクトチームの、変数をとらえたケーススタディからの発展を強く提唱された。

4の提言をうけ、堀内康人氏は、保育者養成の立場、特に、養成をうける人たちに近い立場から、

●幼児教育は心理学が中心ではない。心理学者は幼児教育の中で教育技術を低くみているのではないか、研究が独善的である。

●我々研究者は、物申すも苦しい、現場のひどい現実、さらに

●学生の生活、授業がいっぱいつまっ ていて乳幼児に接することなく講義にお われる実情について、問題を出された。

最後に松村康平氏が、それまでの発言をとらえて、子どもが不在であること、また、研究者が“どういう立場で”“どういうかわり方で”をとらえることが大切であることを指摘され、討議にはいった。

多くの意見の中で、津守真氏の『一口

に現場といっても、子どもが生きている現場と、指導者だけがうきあがっていて、子どもが死んだようになってる現場があること、いきいきした現場をつくることから研究が生まれてくる』という発言や、

児玉省氏の『何か欠けている。子どもをどういうようにするかという哲学が欠けている。小手先のことばかり書かれたカリキュラムがよく売れ、もろもろの保育は、ただもう、幼稚園から教科書を使って、文字を教えたり、数を数えたりしている。この大切なことについて心理学者が誰も何も言わない。何も知らない保育さんがすばらしい保育をしている。研究者は、いかにして人柄を作るかを忘れてるし、現場の人を軽べつしている。保育学会に出て教わるべきである。一方、現場の人はとかく現場にひきずられる。遠くを見る目を養っていかなければならぬ』等の発言は、子どもや保育者に近

い立場からの発言として共感をおぼえながら聞くことができた。

また、帆足喜与子氏の、中教審答申の影響で大ゆれの幼稚園界をとりあげての発言や、堀内康人氏の、現場の先生たちとプロジェクトチームを作って、教育の事実を示していくことへの強い意見は、これからの方向を示すものとして受けとめることができた。帆足氏はこの発言の中で『現在すでにあるところの幼稚園教育で、よい教育を教育心理学ではつきりさせていくこと、現実に幼稚園の先生方がしていることを、教育心理学的にあきらかにしていくこと、問題のないところにかえって子どもの活動の意味を考える必要』について述べられた。ここで私は、現実すでに展開している事実をあきらかにしていく、問題のないところから始まる現実肯定の研究のあり方を改めて確認した思いであった。

森氏は、教育心理学はそれなりの分野があるから、そこでできることをやるべきであるという立場で、中教審でやっていることにまず第一の目をむけることを強調され、他に、品川氏の、学会のあり方について、過去の整理をする心理学ではなく、未来にむかう心理学の方向にむけて学者同志の提携について、三木氏の、データを示すこととその方法の大切さについての発言などがあり、最後に天野氏は、教育の現場において幼児期の目標が混乱していることを指摘『子どもが幼稚園をどのようにして出ていくか、その時どのような目標を達成とするか、その目標値をはつきりさせてほしい。目標値がなかったら評価はできない』と発言、この発言に対して津守氏は『幼児期の教育目標をあるところまで……と考えると、どうしてもできる子、できない子が出てくる。教育目標は人間の発達の中で考え

られねばならない』と発言。天野氏は再び、『到達目標は不必要だといっている幼稚園や教師が被害者を生み出している。幼児期に十分に教育をうければ学校へ行ってから、お客さんになる子どもはいなくなる』と発言、そしてこの発言は、このシンポジウムの最後のものとなった。

この強い主張に出会って、こういう発言をどのようにとらえ、私たちは今後、どのような立場で、また、その立場をどのようにあきらかにさせていくべきか、遠くを見る目と、近くにある、今、ここに展開している生きた子どもの生活を見る目を、どのように操作し使っているか等の新たな課題を成立させることができた。

身のひきしまる思いで見た六甲の夕やけを、私は忘れてはならないと思っ

る。(お茶の水女子大学)